

「吐の会」活動記録

第四期

文責：世話人代表 山田敏之

番外編 (13) 寄席巡りーその7

日時：2016年3月9日(水) 11:50~16:35

場所：お江戸上野広小路亭

出演者：三遊亭遊吉(トリ)ほか

参加者：8名

懇談会：「上野 HAZE」(参加者7名)

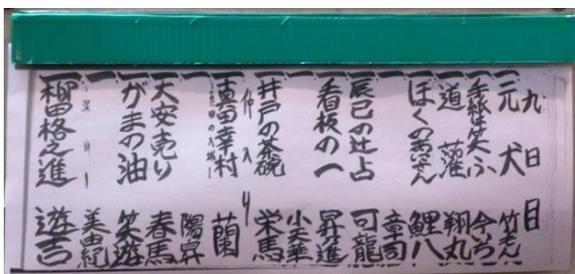


寄席巡りも大手はひと巡りしたので、今回はこぢんまりしたお江戸上野広小路亭を訪れました。狭い会場の高座より座布団席が 20 ほど、その後ろに簡易なパイプ椅子が 60 ほど並ぶという、江戸時代にその辺の町内にあった寄席を偲ばせるような佇まいです。此処は毎月 1 日~15 日が落語芸術協会の定席となっていて、すぐ近くの鈴本演芸場ではお目にかかれない顔ぶれに出会えます。この日はあいにく朝から雨模様のウイークデーなのに 8、9 割の入りで、いささか窮屈な思いがするほどの盛況でした。

開口一番は桂竹もん、入門してやっと 1 年の初々しい芸で『元犬』。青二才と言われて「いえ、白で三歳でございます」と返すサゲは初めて聴くものでした。続いてもう一人前座の古今亭今いちが新作の『手紙は笑ふ』。噺も芸もいまいちと洒落てはいけません。二ツ目の桂翔丸はお馴染みの『道灌』。同じく瀧川鯉八はこれも新作の『ぼくのあにさん』。地噺(フリートーク)のような感じの語り口でした。

次は色物。江戸家まねき猫の代演として和風漫談家の宮田章司。お得意の江戸の売り声を、七色唐辛子から千金丹・万金丹の薬売り、鋳掛屋に包丁砥ぎ、竿竹売りによかよか飴……と、たっぷり聴かせてくれました。次は三笑亭可龍で『辰巳の辻占』。比較的珍しい噺に意欲的にチャレンジしました。小学三年で三遊亭圓生に惚れ込んだという可龍の先が楽しみです。春風亭昇之進は『看板の一(ピン)』。ちょっと早口過ぎる感がありました。次の奇術は少し前に出演した宮田章司の連合の松旭齋小天華。喜寿は超えても腕に齢はとらせぬと、鮮やかな手捌きで観客を欺き通しました。中トリ(仲入りの前)はこの道 49 年の三遊亭栄馬で『井戸の茶碗』。淡々とした中にもベテランの味わいある高座でした。

仲入り後は講談の神田蘭、大河ドラマのご縁でしょうか『真田の入城』。お後が漫才の宮田陽・昇。とかくドタバタしがちな若手漫才師の中では安心して聴けるコンビです。次の三遊亭春馬(はるば)の演題は『大安売り』だそうですが、鯉八同様に地噺的な色彩の濃いものでした。新作が三作もあったのに、これぞと言うものが無くいささか残念でした。続く三遊亭笑遊は『がまの油』。この噺は酔っぱらってからの口上が聴き所なのですが、笑遊は流石にそつ無く演じていました。膝替わり(トリの直前)は鏡味正二郎の太神楽に代わって、春風亭美由紀が都々逸などで美声を聴かせた後、ちょっと踊って程よく座を盛り上げ、主任の三遊亭遊吉に交代。遊吉はトリに相応しい大ネタ『柳田格之進』を丁寧に演じました。帰参後に受け出した娘が重病に罹ってはいるものの、「後に両家の間で良縁が纏まることになるという……」が結び。噺家の中には番頭と娘が一緒になるところまで話す人もいれば、娘が死んでしまうという筋書にする人もいて、実にさまざまです。それらを聴き比べるのもこの噺の楽しみの一つでしょう。



終演後は燻製と海外ビールが売りの「上野 HAZE」で、聴いたばかりの噺を語り合いつつ軽く一杯やってから、降り止まぬ雨の中をそれぞれ帰途につきました。

第 24 回例会 —落語—

日 時：2016 年 2 月 5 日（金） 14:30～16:30

場 所：山ノ内公会堂

出演者：入船亭小辰（落語協会 二ツ目）

演 目：『金明竹』『火事息子』『野ざらし』

参加者：41 名（うち女性 8 名）

懇談会：「狸穴 Cafe」（小辰さんを含めて 8 名参加）



入船亭小辰さんは入船亭扇辰師匠の一番弟子で、しっかりした正統派の芸風で知られる若手二ツ目です。最近のご当地でも江の島落語会（2014.6）、かまくら落語会（2015.7）などに出演しています。この日は 44 名と参加者数最高記録を更新できる筈でしたが、当日 3 名の欠席があり、タイ記録の 41 名に留まりました。これで 41 名は 4 回目ですが、なかなかその壁が破れません。次回の喜多八師匠に期待しましょう。

「いやとび」の出囃子で登場し、最初の一席はお馴染みの『金明竹』。この噺の眼目である道具七品の言い立ては、演者によっては東北弁、名古屋弁、博多弁その他各地の方言や、英語訛りで演じることもありますが、小辰さんは伝統に従い上方弁で、道具七品の品々も標準的なものでした。柳家三三師匠に教わったとのことですが、さもありませんと思わせる奇を衒わない語り口だったといえるでしょう。

そのまま続いての二席目は『火事息子』です。一席目とは打って違って、人情味豊かな中に程好い笑いが鑿められた名作です。火事好きが高じて臥煙（がえん＝定火消に属する火消人足）に身を落として勘当されてしまった若旦那が、ご近所の火事の際に実家の手助けをして勘当を許されるという筋書は、親子の情愛の深さを描いて時代を超えた共感呼びます。小辰さんは、若旦那が火事好きになったのは、乳母が火消しの女房で火事さえあれば幼い子に見せていたせいだということまで語ってくれました。普段は略されることが多いのですが、幼児期の刷込み現象を示す興味深い内容といえます。

仲入り後の三席目はふたたび賑やかな噺で『野ざらし』。隣家に住むご隠居さんの不思議な体験談を聞いて、女を目当てに釣りに出た八つあんの陽気な騒ぎっぷりが滅法楽しい噺です。ここでも最後に幫間が登場するところまできちんと演じきり、正統派の小辰さんらしい律儀さを発揮しました。

普通はここで質疑応答となるのですが、今回はちと趣向を変えました。「咄の会」は今回で年 6 回の例会を丸 4 年続けたこととなります。その 24 回すべてに欠かさず参加していただいた瀧川謙司さんに「皆勤賞」を差し上げることにしました。その記念品として小辰さんに楽屋で書いてもらった色紙と、小辰さんの手拭を、小辰さんご自身から瀧川さんにお渡しいただきました。そして惜しくもたった 1 回だけ欠席された長谷川信夫さん、神戸潔さんのお二人には「準皆勤賞」として小辰さんの手拭を進呈



いたしました。この手拭は「第二回噺家の手ぬぐい大賞」を受賞したという由緒ある品です。

終演後の懇談会は、会場のすぐ目の前にある「狸穴 Cafe」で、会員 7 名が小辰さんを囲んで四方山話に興じました。

第 23 回例会 —落語—

日 時：2015 年 12 月 4 日（金） 14:30～16:30

場 所：山ノ内公会堂

出演者：萩原貞臣（春風家目留変 東大落語会）

演 目：『船徳』

参加者：26 名（うち女性 6 名）

懇談会：「狸穴 Cafe」（萩原さんを含めて 8 名参加）



春風家目留変（はるかぜや めるへん）こと萩原貞臣（はぎはら さだおみ）さん、昭和 62 年東大文学部国語学科卒の落研 OB 武闘派です。教科書出版の東京書籍を経て、現在は祥伝社書籍出版部編集部編集長という要職にある方ですが、ウィークデーに堂々と休暇をとり、落語演るなら千里も一里と、はるばる千葉県は松戸市から駆けつけていただきました。

演目は冬空を忘れさせる『寢床』。今年の東大落語会寄席にかけたネタと同じですが、そちらでは時間の制約があって端折らざるを得なかったのを、今日はマクラもたっぷり入れて目いっぱい演りますとの意気込み。「外記猿」の出囃子に乗って登場し、「今日のお客様は鎌倉のセレブ、知的エリートの方ばかりで…」と、話し始めた瞬間から観客の心をぐっと掴む話術の妙に笑いが絶えません。爆笑度は過去の例会の中でも特筆すべきものでした。道楽の末勘当され船宿に居候中の若旦那、俄か仕立てで船頭になったものの、暑い盛りに素人同然の腕前で大事な客を乗せて悪戦苦闘し、ついに力尽きて青息吐息。「おかに上がったら、船頭を一人雇ってください」というサゲに至るまで一気呵成。船頭たちが親方に見当違いの言い訳をするくだりを全てカットしたのに、何と 40 分を超える大熱演で、すっかり真夏の船上にいるような気分になり、本当に楽しませてもらいました。



一息入れて、今度は本業の出版ビジネスに関するお話です。春風亭昇吉さんの『東大生に最も向かない職業』はご自分で手掛けられたこと、円丈師の『落語家の通信簿』が二派に分かれた圓生門下の融和のきっかけになったこと、『歌丸極上人生』が「笑点」で紹介されて版を重ねたことなど祥伝社の落語本の話に始まり、出版業界の景気推移や、売れる作家の話などを伺い、ついで新しい本の企画の進め方に移りました。最初企画会議にかけるのは紙 1 枚ほどの簡単な資料。出版決定権を編集部が持つか、営業部が持つかは出版社によって異なるが、初刷部数は出版直前に営業部が決めるとのこと。書籍出版が盛況だった頃に比べて初刷部数はかなり減っているそうです。本の宣伝ではテレビの「金スマ」や「王様のブランチ」などでの紹介が効果的であること、新聞広告については「三八（さんやつ）」、「全五」「半五」などの業界用語を学びました。また個人で本を出したい場合のアドバイス、図書館が新刊本を購入することの是非、書籍販売でネット通販の占める割合、その他“ここだけの話”もふんだんにあり、残念ながらとても紹介しきれません。本好きな会員にとってはたいへん貴重なお話を沢山伺うことができ一同大満足でした。なお、この日の模様を萩原さんはブログに書いていらっしゃいます。<http://hagihara3845.cocolog-nifty.com/> を是非ご覧ください。

「狸穴 Cafe」での懇談会は萩原さんを入れて総勢 8 名。同じ落研 OB 武闘派の田頭先輩も加わり、親子ほどの年齢の違いを超えて話がはずみ、楽しい夕べを過ごしました。

番外編 (12) 東大 HCD 東大落語会寄席

日 時：2015 年 10 月 17 日 (土) 12:00～17:50

場 所：東大本郷キャンパス 法文一号館二十一番教室

出演者・演目：下図

参加者：4 名？ (自由参加のため正確には不明)

懇談会：なし



番外編 (12) は、恒例のホームカミングデー東大落語会寄席で、数名の方に参加いただきました。事前の東大新聞ではお薦め 3 企画の一つに選ばれ、入場者は 530 人という過去最高記録でしたし、東大落研ゆかりの三遊亭圓橋師匠夫妻、小圓朝師匠も激励に来られるなど、年々充実の度が増してきます。

この会は淡青会にはお馴染みの、藤井隆さんが幹事となって運営されています。今年は例年より出場者が多く 14 名を数えました。出演者と演目は下に示すとおりですが、緑色のマークをつけた方々は既に「咄の会」に出演いただいていますし、青色マークの萩原さんには今年 12 月の第 23 回例会に出演をお願いしています。「咄の会」来演済みの長束さん (第 3 回)、田頭さん (第 5 回)、などの名が見えませんが、時間の制約もあって後進に譲られたのでしょうか。本職はだしともいうべき聴き応えのある噺が続き、聞き惚れていたお蔭で会場の写真を撮ることをすっかり忘れてしまいました。写真が無いのも寂しいので代わりに三四郎の池の風景を掲げておきます。「淀みなく流るる嘶舵を絶え行方も知らぬコイの道かな」では洒落にもなりません。

大塚さん (「咄の会」未出演) と正さんは、今年 9 月 26 日に「横浜にぎわい座」で行った「第三回 迷人落伍会 東大落研・卒業三十八士一年の会」にも出演されましたし、また今年から柏市で始まった「柏の葉キャンパス寄席」は、我々の「咄の会」も参考にして企画されたとのことですが、2 月 14 日の第 1 回には、十時さん、藤井さん、荒瀬さん (「咄の会」未出演) が出演されましたし、11 月 14 日に予定されている第 2 回には、十時さん、藤井さん、佐藤さんの出演が予定されているなど、“武闘派”は大活躍です。今後も「咄の会」未来演の方々をお招きするのを楽しみにしています。

演目	
岸柳島	駒亭 志 舞 (渡辺)
孝行糖	東中亭 どろ珍 (荒瀬)
替わり目	愛子亭 朝大 (家富)
宿屋の富	信加亭 艶 満 (鞠子)
菊詰問答	三山亭 多 樂 (十時)
あくび指南	於家 馬 亞 (佐藤)
不動坊	何亭 骨 太 (加藤)
船徳	春風家 目留変 (萩原)
お見立て	相亭 不 撰 (大塚)
火焰太鼓	晴れる家 きりすと (駒形)
七度狐	和朗亭 南 坊 (首藤)
厩火事	バルク亭 源 内 (平賀)
疔気の虫	宮亭 大 奥 (正)
文七元結	風呂家 さん助 (藤井)

午後五時半頃終了予定

第 22 回例会 —落語—

日 時：2015 年 10 月 2 日（金） 14:30～16:30

場 所：山ノ内公会堂

出演者：柳亭市楽（落語協会二ツ目）

演 目：『強情灸』『風呂敷』『鼠穴』

参加者：33 名（うち女性 7 名）

懇談会：「鈴や」（市楽さんを含めて 7 名参加）

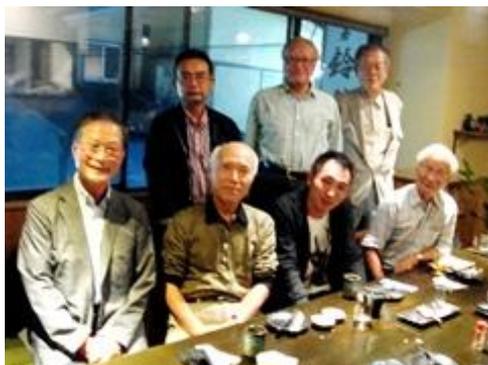


現在落語協会会長である柳亭市馬師匠の惣領弟子柳亭市楽さんにご出演いただきました。今年 1 月の学士会落語会で五街道雲助師匠の前に出させていただいたご縁で来演が実現したものです。師匠譲りというのか、明るく大らかな語り口は誰にも親しみやすいものがあります。

出囃子は「三亀松三番」なのですが、手元の CD に入っていないため、弟弟子の市弥さんが使っている「春どう」で上がろうということになりました。まずは『強情灸』。大層熱いと評判の灸を我慢して据えてきたと、見栄っ張りの友人が自慢げに語るのを聴いた負けず嫌いの男、負けるものかと特大のモグサの塊を腕に乗せて火をつけた。最初は鼻歌まじりだったが、火がまわるにつれて我慢しきれず夢中で灸を払いのける。それでも負け惜しみに「俺は熱くはねえが、五右衛門はさぞ熱かったろうなあ」というサゲ。見栄っ張りと言地っ張りという二人の江戸っ子のおかしさを描いた古典落語の名作の一つ。熱さを堪える表情や堪えかねて思わずモグサを払いのける仕草など、目でも楽しむ噺です。

一席終わってそのまま次の噺『風呂敷』に続きます。期せずして（か意図してか訊かなかったのですが）この二席はともに五代目古今亭志ん生が得意としたもの。留守中に引っ張り込んだ間男を慌てて押入れに隠したはよいが、酔っぱらって帰宅した亭主がその押入れの前に座り込んでしまった。困り果てた女房は同じ長屋に住む“兄（あに）さん”に助けを求め、その機転で無事脱出に成功するという噺。兄さんが女房に文句をいうところでの志ん生流のくすぐりは無暗に面白いし、間男を押入れから逃がしてやるときの、兄さんの身のこなし、目の動きなど見るべきところの多い名作です。

仲入り後の三席目は大ネタ『鼠穴』。私がまだ学生だった頃、六代目三遊亭圓生の噺をテレビで見て、そのあまりの名演に魅了され、ますます圓生への傾倒を深めた懐かしい噺です。商売に成功している兄を頼って江戸に出てきた弟が、兄から借りた三文の元手で苦勞の末立派に身を立てることができたが、兄の家に礼に来て泊まったその晩に火事で自宅が焼け落ち……というストーリー性の高い名作です。



三席がそれぞれ古典落語の三つの異なる側面を見せるようなネタ選びでしたし、志ん生や圓生とはまた違った、市楽さんらしい現代風の味付けを十分楽しむことができました。恒例のトークタイムでは、前座、二ツ目、真打といった落語界の仕組みをはじめ、芸の磨き方とか、市楽さんの落語に対する思い、その他いろいろな話題で盛り沢山の対話ことができました。

お馴染みの「鈴や」での懇談会は、いつもより人数が少なかったのですが、その分だけ密度の濃い会話が飛び交いました。

第 21 回例会 —落語—

日 時：2015 年 8 月 7 日（金） 14:30～16:30

場 所：山ノ内公会堂

出演者：佐藤弘毅（高座名：於家馬垂 東大落語会）

演 目：『かぼちゃ屋』『新聞記事』『皿屋敷』

参加者：27 名（うち女性 7 名）

懇談会：「笹の葉」（佐藤氏を含めて 11 名参加）



今回は「咄の会」史上最も若い出演者をお招きしました。平成 6 年法学部卒業で、大方の参加者にとっては息子の世代です。文部科学省の国立教育政策研究所の研究開発部長という要職にある佐藤弘毅さん。ウイークデーなのにわざわざ休暇をとって「咄の会」に馳せ参じていただきました。

最初の演目は『かぼちゃ屋』。この噺を得意としていた五代目小さんに敬意を表して、出囃子は「序の舞」で登場。頭のネジがどこかちょっと緩んでいる与太郎さん、そんな甥を何とか一人前にしてやろうという親切な叔父さん、困っている人を見たらひと肌脱ぐのをいとわぬいなせな若者・・・昔はそんな人がどの町内にもいたんだね、というような人間模様が温かく描き出されました。

一席終わってそのまま高座で、“余は如何にして落語信徒となりし乎”といった地噺をたっぷり。なにしろ東大に入ることを目指したのではなく、東大落研に入ることを目指して受験したというのだから、もう根っからの筋金入り。文科省に勤めてからも落語の縁は切れません。北九州市に勤務していたときに落語会を開くことになったのが今も続き、年に一度、北九州で高座に上がっているそうです。

そこで終わるかと思いきや、そのまま続けて『新聞記事』に入り、短い噺ながら丸々一席演じるという大サービス。この噺は明治末期に出来た上方落語の『阿弥陀池』を、昭和初期に東京に移植したのですが、新聞に出ているといわれるとつい信じてしまうのは、今も昔も変わらぬ人の性（さが）ですね。「泥棒の入った先が天麩羅屋だからすぐ挙げ（揚げ）られた」とか「尼になったのは、天麩羅屋の女房だけに、すぐ衣を着たのだ」などといった地口の面白さを楽しく聴くことができました。ここまでで 1 時間を超えてしまったのは、落研 OB で一人三席というのと並んで、「咄の会」史上初のことです。

短い仲入りの間に佐藤さんは浴衣姿（上の写真）に早変わり。夏の噺『皿屋敷』に似合う涼しげないでたちで、「野崎」に乗って高座へ。良く知られた『番町皿屋敷』を下敷きにした噺です。怖いもの見たさという古今東西に通じる心理で、お菊の幽霊は人気急上昇。そこで今世間を賑わせている話題を巧みに盛り込んだ自作のくすぐりで満場の笑いを誘ったのは、さすがと感心しました。現代の売れっ子タレントなみに愛嬌を振りまいて働き過ぎた幽霊が、明日のノルマまで果たして休暇をとろうという思いがけない展開は、幽霊噺には程遠い楽しいサゲで満場大爆笑。皆が心地よいカタルシスを味わいました。



終演後の懇談会は、北鎌倉らしいお店でという佐藤さんのご希望に沿って、久しぶりに「笹の葉」で。健康自然食に舌鼓を打ちながら、落語のことはそっちのけで、結婚相談から料理教室に至る幅広い話題に、時の移るのを忘れました。

番外編 (11) 寄席巡りーその6

日 時：2015年7月3日(金) 14:00~16:30

場 所：横浜にぎわい座 (右図は芸能ホールの緞帳)

出演者：春風亭一之輔(トリ)ほか

参加者：8名(懇談会は6名)

懇談会：「HUB Colette・Mare みなとみらい店」



今回は身近な横浜にぎわい座を訪れました。朝から大雨、雷、強風、波浪、洪水注意報が出ているという悪天候をものともせず、予定した全員が参加しました。『蔵前駕籠』の科白を借りれば、“寄席通いの決死隊”というところでしょうか。でも終わって外に出たらすっかり雨が上がっていたのは、やはり“天の感ずるところ”(『二十四孝』)でしょう。「横浜にぎわい座有名会」は普通の寄席と違って毎日出演者が変わりますが、この日のプログラムは下のとおりです。



開口一番は木久扇門下の林家扇兵衛、『初天神』でした。大真打もしばしば高座にかけこの嘶、前座らしい幼さを残しながらも一生懸命演じてくれました。柳亭市弥は『金明竹』。道具七品の言い立ては若手嘶家の口慣らしの一つですが、まずは無難な出来でした。演者によっては、口上が東北弁だったり、外国人だったり、あれこれ奇を衒う向きもありますが、市弥は一般的な関西弁でした。次のここあはハンカチや、カードを可愛らしく操り、最後はリングマジックで華やかに締め括りました。中トリの春風亭柳之助は『片棒』で、なかなかしっかりした芸を見せてくれました。しかし時間の制約からでしょうが、長男、次男だけで降りてしまったのはいささか残念。浪費家の兄達と違って、親父譲りの吝嗇家である三男まで演らないと決着がつきませんし、そもそも何故“片棒”なのかわかりません。

仲入り後はまず雷門小助六の『禁酒番屋』。最後の小便を持ち込むくんだりでは、下手すれば下品になりかねないところを、その一歩手前で上手く止めていました。“膝替わり”はホンキートンクの漫才、いつもよりやや笑いが少ない感もありましたが、年期の入った芸といえます。そしてトリは期待の星、春風亭一之輔の『笠碁』。五代目小さんの名演が今も脳裏に鮮やかで、それに比べればまだ若さが感じられますが、さすが一之輔らしい好演でした。中でも、待った待たないの口論の中で「子供の頃、雨に濡れながら暗くなるまで待ったこともあるのに……」という耳新しい科白が入り、それが最後になって「あの時、雨の中を待っていてくれて有難う」という意外なサゲに繋がったのは、聴き慣れたこの嘶に新しい光を添えるものでした。将来の大器としての素質が窺われる優れた一席だったといえるでしょう。

終演後は雨の上った道を桜木町駅の反対側まで歩き、懇談会参加者の一人がよく利用するという洒落た英国風パブを訪れ、今見て来たばかりの演芸を肴にビールで喉を潤しました。

第20回「咄の会」 ―講演―

日時：2015年6月5日（金） 14:30～16:50

場所：山ノ内公会堂

出演者：山本 進（芸能史研究家、鎌倉淡青会会員）

演題：『上方落語の軌跡と桂米朝の奇跡』

参加者：26名（うち女性4名）

懇談会：「狸穴 Cafe」（山本講師を含めて11名参加）



今回は3月19日に鬼籍の人となった人間国宝桂米朝師を偲んで、標題の講演をお願いし、まず資料に沿って明治以降の上方落語の盛衰を、ついで米朝師の生涯を詳しく説明していただきました。

幕末には、桂、林家、笑福亭、立川の四派が覇を競っていたが、明治に入ると「上方桂派中興の祖」といわれる初代桂文枝とその弟子の四天王の活躍により「桂派」が隆盛を極めた。しかし初代文枝没後、派内の不和から明治26年に「浪花三友派」が結成され、「桂派」と対抗するようになった。その後明治43年に「反対派」が生まれ、同時に三代目文枝が世を去ったことから「桂派」は急速に凋落した。一方の「三友派」も後を追うように力を失っていった。そこに登場したのが、現代でもよく知られている吉本興業で、最初「反対派」と提携する形でスタートしたが、徐々にそれを取り込みつつ発展し、やがては「三友派」も吸収し、いわゆる「吉本花月派」が上方演芸界を牛耳ることになる。しかし昭和に入ると、吉本がエンタツ・アチャコなど漫才芸に重点を移したため、落語は徐々に衰退し、昭和20年代半ばにはほぼ壊滅的な状態となった。それを苦勞の末見事に復活させたのが、六代目松鶴、三代目米朝、三代目春團治、五代目文枝の「戦後上方落語復興四天王」で、中でも米朝の活躍に負うところが大きい。

米朝は大連生まれ姫路育ち、実家は神職であった。上京して大東文化学院に学ぶ中で正岡容に傾倒。昭和20年に召集されたが、病に斃れたまま終戦を迎えた。戦後暫くして桂米團治に入門し三代目桂米朝を名乗った。米朝はさして立派な名跡ではなかったが、終生改名せずその名を大きくした。ラジオやテレビでの活躍により大衆の目を落語に向けさせ、嘶そのものでも卓越した芸で人を魅了し、上方落語の復興に大きく貢献した。落語の研究にも熱心で、著書も多く、古い嘶を復活させもした。1996年嘶家としては小さんに次ぐ二人目の人間国宝になり、2009年に演芸人として初めて文化勲章を受章した。



講演に続いて米朝自作の『一文笛』のビデオを鑑賞し、そのサゲについても詳しい話がありました。さらに、米朝が司会し、四天王が揃って囃子方を務めている「上方寄席囃子」というまことに貴重なお宝映像を懐かしく観て、最後に三田純市の新作落語『まめだ』で米朝の端正な芸をじっくり味わいました。

終演後の懇談会はすぐ近くの「狸穴 Cafe」で。写真の10人が山本さんを囲み、落語の奥深さや、米朝の芸の見事さなどを楽しく語り合いつつ、たっぷり2時間を過ごしました。

第19回「咄の会」 ―落語―

日時：2015年4月3日（金） 14:30～16:30

場所：山ノ内公会堂

出演者：六代目三遊亭圓橋（五代目圓楽一門会真打）

三遊亭橋也（同 二ツ目）

演目：『茶の湯』『菟菟問答』（圓橋）『都々逸親子』（橋也）

参加者：41名（うち女性10名）

懇談会：「鈴や」（圓橋師匠を含めて12名参加）



開設三周年記念として、「深川の師匠」こと三遊亭圓橋師匠とその三番弟子の橋也さんをお招きしました。圓橋師匠は昨年4月来演の萬橋師匠を育てた方ですが、その昔東大落語研究会の熱心な指導者であった三遊亭小圓朝師の最後の直弟子で、三遊派の正統を継ぐ風格が感じられる方です。参加者数は第17回以来3回連続タイ記録の41名でしたが、女性は10名と過去最高です。過去に出演された落研OBの十時さん、田頭さん、藤井さんらも顔を揃え、三周年を祝っていただきました。



まず「草競馬」の出囃子に乗って登場したのは、真打昇進も近いという橋也さん。落語を聴いて笑うことが健康に良いというまくらを振ってから『都々逸親子』を披露。この噺は平成8年に亡くなった三代目三遊亭圓右の新作ですが、親子で都々逸の作りっこをして、親が子供にすっかりやり込められてしまうという滑稽噺です。最近進境著しい橋也さんの軽妙な語り口に満場爆笑につぐ爆笑。笑いの大きさは、おそらく「咄の会」始まって以来の最高ではなかったでしょうか。

圓橋師匠は「見て楽しめる咄」という副題をつけた二席。一席目はいつも使われている「小鍛冶」の出囃子で上がり『茶の湯』、仲入りを挟んで二席目は「中の舞」で上がり『菟菟問答』。「中の舞」の途中で音を止めるタイミングや止め方など、事前に橋也さんから詳しく聞いていたのですが、それを意識するあまりほんの少しだけ早く切ってしまい、失敗の冷や汗をかきました。前座修行の難しさをほんのちょっぴり垣間見た気分です。

二席ともよく知られた噺ですが、「見て楽しめる」と銘打っただけに、表情や仕草も笑いを誘う大きな要素になっています。中には過剰な演出で笑いをとろうとする噺家さんもありますが、圓橋師匠は程よく抑制のきいた品格ある高座で、会場に心地よい笑いとう充足感を与えていただきました。優れた噺を優れた演者で聴く醍醐味をたっぷり味わえた二席といえます。また『茶の湯』のサゲで、お百姓さんに代えて一面の菜の花畑の中の女のひととしたのは、彩を添える斬新な趣向として印象に残りました。

高座を降りた後の聴衆との交流では、算盤を扱う仕草や玉をはじく音の出し方を例に芸の修行の難しさを聴いたり、禅問答の解説があったり、短時間ながら充実したひと時でした。その後有志がお馴染みの「鈴や」で圓橋師匠を囲んで歓談しましたが、途中で落語の一節を聴くこともでき、お開きの前には都々逸まで披露していただくという贅沢極まりない内容で、時の移るのを忘れて楽しみました。